tableau capital; c'est le genre éclatant et plein de verve de *La Descente de croix* d'Anvers, inférieur à celui-ci pourtant...》《... Dans Rubens, vigueur, coloris brillant, fougue de composition. C'est un des beaux ouvrages du maître...》このように、絵画においてもスタンダールは幾分かではあるが、~~ちょう~~激しい色彩の現前や réalisme に対する理解へと開眼しはじめているかにみえる。少なくとも *Lamiel* のような作品からうける印象は、clair-obscur の画家コレッジョからしだいに遠ざかって、むしろフランドル派の絵画への接近を思い起こさせる。

メラニー、バルザック、ルーベンス――これら 1830 年代半ばから浮上してくる名前は、メチルドや崇高化や理想美になんらかのかたちで対立するものを暗示している。『僧院』の神話に絡め取られることなく晩年のスタンダールを眺めれば、たしかにこうした名前のさきにあるものが見えてくる。とはいうものの、「理想化すること、もっぱらヒロインの顔においてのみ完全なる美に近づくために」という記述（1835 年 3 月 14 日）が語るように、小説における理想美の追求、とくにヒロインの顔の理想美は放棄されたわけではない。だからこそ、理想化と具体性とのはざまに揺れながら、スタンダールはヒロインの具体的な肖像を直接描くまいとするのである。ちょうどエレーナ・ダ・カンピレアーリやベアトリーチェ・チェンチが肖像画を通してその美貌を描写されたのと同じように、シャストレール夫人の肖像はリュシアンの事後的想起のなかで描かれ、ラミエルのそれはクレマン師による肖像をとおして語られるのである。「いまの文学」に対する気がかりと理想美への性向とのあいだにこそ、こうした肖像描写の手法が生まれる素地があったというべきだろうか。

第 27 回（2000. 03 .25　於京大会館）

スタンダールと《温泉》

Stendhal et les 《 stations thermales 》

井出 勉

19 世紀ヨーロッパ文学に表れた《温泉》の描写を読むとき、われわれはどうしても頭の中で 1800 年代後半の温泉地をイメージし、作品を読み解いてはいないだろうか。確かにこれにはもっともな理由がある。温泉地を舞台とする多くの有名な小説は１９世紀後半以降に書かれたものがほとんどであるからだ。これらを一般に《温泉文学》と呼ぶことを許してもらうなら、ドストエフスキーの『賭博者』（1866 年）、モーパッサンの『モントリオール』（1887 年）、チェーホフの『犬を連れた奥さん』（1899 年）などはその代表で

あろう。スタンダールの同時代ということなら、レールモントフの『現代の英雄』(1840年）をあげることができる。これらに加えて《旅日記》、《書簡》や《回想録》の類がヨーロッパ各地の《温泉》の情報を与えてくれる。ゲーテ、ベートーヴェン、ハイネ、テーヌなどに加え、古くは、モンテーニュの『モンテーニュ旅日記』、カザノヴァの『回想録』も豊かな情報であふれている。もちろん１９世紀前半にはすでにヨーロッパの温泉地は、王侯貴族たちにとって重要な《社交場》であり、また《外交の場》としての重要性も増してきている。しかしながらわれわれの多くの《温泉》のイメージは、鉄道開通後の《リゾート》としての温泉保養地で形作られている。実際、様々なヨーロッパの《温泉》についての研究書をかいま見ても、古代や中世、１９世紀後半のリゾート地としての《温泉》に多くの頁がさかれている。癒しの《水》という点で、《海水浴》をも含めた 示唆に富むコルバンの『浜辺の誕生』や山田登世子の『リゾート世紀末』にしても現代の《温泉リゾート地》への過渡期に当たる１９世紀前半部については欠落している感が否めない。スタンダールの《温泉》の描写を真に同時代的に理解するためにも、今回はロマネスクな作品における《温泉》を取り上げ、とりわけ『ミーナ・ド・ヴァンゲル』(『ミーナ』は、1829年12月から1830年1月にかけて『赤と黒』の創作過程の中途で平行して執筆された作品である）をスタンダールのいわゆる《温泉文学》ものとして改めて見つめ直したい。『ミーナ』はスタンダールの作品中ではそれほど高い地位を得ているとはいえず、『赤と黒』や『パルムの僧院』の原型的な作品として捕らえられている嫌いがあるが、温泉地を舞台とした作品としての流れの中で読み解くことで『ミーナ』の《 nouvelles lectures 》の一つの契機となることを期待するものである。

さてモーパッサンの『モントリオール』は、クレルモン=フェラン近くの温泉地が舞台であるが、そこから遠くない温泉地ヴィシーとのスタンダールの関わりから見ていきたい。この点に関しては、『スタンダール・クラブ』の短い雑誌論文ではあるが、アルマン・ヴァロンの『ヴィシーにおけるキュリアル伯爵夫人』(1980年）がすでにある。周知のようにキュリアル夫人はスタンダールの恋人の一人だが、そのクレマンティーヌ・キュリアリルがヴィシーに療養のため滞在したことは、スタンダール宛の1834年8月11日付の手紙からわかる。さらに前述のアルマン・ヴァロンが見いだした「温泉を飲みにきた外国人のリスト」なるものがあり、それによるとキュリアル夫人はヴィシーの温泉保養地に1832,1834,1835,1837年と滞在したことがわかっている。またこのリストから正確な日にちも1834年7月10日であると特定されている。よってキュリアル夫人は、だいたい型どおり夏のシーズン中３週間ほど滞在していたことになる。この地でキュリアル夫人が治療を受けた温泉医が、スタンダールの友人でもあった、ドクター・プリュネルその人である。もっともスタンダールは『アンリ・ブリュラールの生涯』では厳しい判断を下している。どうやらキュリアル夫人に言い寄ったことがその一つの原因であるとも言われている。それはともかくこのプリュネルは1833年《 médecin-inspecteur des eaux de Vichy 》に任命されている。「温泉医兼温泉検査官」とでも訳される地位で、モーパッサンの小説にも登場するが、有力な患者を求めてかなりどろどろしたなわばり争いがあったようである。この医師については、ジャン・テオドリデスも『リュシアン・ルーヴェン』のデュ・ポアリエ医師のモデルの一人と考えており、スタンダールと同じドーフィネ地方出身であ

ったこともその要因であろう。

またアルマン・ヴァロンは、当時のヴィシーについて、社交的生活はもっぱら有名なホテルのサロンで展開されており、公衆浴場のような温泉の建物はルイ・フィリップの治世の最後にしかその成功を見ないと言っている。確かに温泉に付随する建物に関してはそう言えるが、『ミーナ』を読むとまた違ったにぎわいが聞こえてくる。いずれにせよこうしたヴィシーとの関わりが 1834-1836 年の『ルーヴェン』執筆時にスタンダールの注意を引いたことは間違いない。リュシアンの従兄のエルネスト・デヴェルロアが、未来の学士院入りを狙って看護人としてヴィシー温泉に出向いたことが二度言及される。『パルムの僧院』においても、形だけとはいえジーナの夫、サンセヴェリーナ公爵はスイスのバーデンで没する。つまり温泉保養中に死んだことがわかる。ただこれらの記述はスタンダールらしく具体的な描写がなく細かいところは想像力で補わざるを得ない。確かにヴィシーという温泉地に限ればアルマン・ヴァロンの言うことはもっともであるが、『ミーナ』はすでに 1829 年に書かれていることを忘れるべきではない。そこにはかなり具体的な描写が見られかなり早い時期にスタンダールが温泉地に通じていたことがわかる。『ミーナ』ではブールジェ湖に望むエクス・アン・サヴォワ（現在のエクス・レ・バン）の鉱泉地が主要な舞台となるが、それ以外にも様々な温泉地が言及される。１９世紀前半においては、エクス・アン・サヴォワと並んで最も流行したバニェールの温泉（オート=ピレネー県）を始めとして、ゲーテやベートーヴェンも湯治に行ったボヘミアの温泉地テプリッツ、ベルギーのスパ、スイスのバーデンといった名があげられる。後年の『薔薇色と緑』でも、いくらか名前が変わり、ボヘミアのピルニッツ、17 世紀来有名で特にジョージ３世在位（1738-1820）の頃流行したイギリスのチェルトナム、エクス・アン・サヴォワといった温泉地が言及されているのである。

『ミーナ』においてエクス・アン・サヴォワの湯治場が、その主要な舞台となる背景には、カザノヴァの『回想録』の影響が指摘されている。カザノヴァは実際湯治場の醸し出す一種いかがわしい雰囲気を描いている。カザノヴァの目には、温泉地とは、湯治よりも陰謀や賭博、色事の渦巻く場所なのである。ミーナも湯治場の口入れ屋の女将に斡旋される形でラルセー夫妻の小間使いに身をやつす。そしてエクスの社交界の貴婦人たちにはその身元のうさんくささを詮索される。一般に《温泉文学》といわれるものには、娼婦的な身元不明の怪しげな女性が登場するものだが、スタンダールも温泉地を舞台とすることによって、温泉地の持つ独特の雰囲気、開放的で放埒な一種の《アジール》としての特権的な性格を利用したといえる。しかしスタンダールの描く《温泉》にはそれだけではない他の面もあるのではないだろうか。例えば、ゲーテやテーヌの紀行文には博物学的記述があり、《温泉》に関する記述と重なり合っている。スタンダールもラルセーの中に素人植物学者の要素を取り入れている。《植物学者》ルソーと関わりが深いシャンベリに近いエクスの地が選ばれたのも故なきことではない。さらに、健康面でのスタンダールの不安も湯治場という舞台設定に反映されているはずである。こうした面からもスタンダールの《温泉》は見直す必要があるのではないだろうか。最後に、アンドレ・ドワイヨンによれば、1821 年以来パリ近郊、アンジアン（Enghien）では硫黄泉が採掘され、1825 年頃には急速に流行となり、《 Les Quatre Pavillons 》と命名された湯治客のためのホテルも建て

られる。ここで生活に困窮したスタンダールの妹ポーリーヌが、1829 年まで、4 年間かなりつらい仕事に従事したと言われている（この点は岩本和子氏の指摘による）。まさに『ミーナ』の書かれる時期と一致するのである。

以上、スタンダールと《温泉》の関わりは、『ミーナ』だけではなく他の著作とも比較検討し、改めて見直す価値が十分にあるように思われるのである。

【国際コロック報告】

コロック報告

杉本　圭子

フランスにおけるスタンダール研究の活況を示すように、昨年度も二つの国際コロックが開催され、若い世代の登場も目立ちました。以下、その梗概を報告させて頂きます。なお、「晩年のスタンダール」のコロック集は、『H.B.』第 4 号として今年の 5 月に出版の見こみです。

○「スタンダール『パリ-ロンドン』」（1999 年 5 月 10 日、11 日、パリ第 3 大学主催、於ソルボンヌ大学）

1997 年に装いあらたにストック社より刊行された『イギリス通信』についての初のコロックである。発表者は 17 名、イギリスの読者に向けてフランスの最新の出版状況を紹介するという名目のもとに、スタンダールが 1820 年代のフランス社会、政治、音楽、演劇、ジャーナリズム、アカデミズムについて縦横に語ったという本書の性質上、多岐にわたる発表が予想された。実際、音楽の分野ではシュゼル・エスキエ氏が 1822 年の記事とのちの『ロッシーニ伝』とを綿密に比較検討、演劇についてはマルティーヌ・リード氏がフランスにおけるシェークスピア受容とそれに対するスタンダールの反応を三段階に分けて追った。周知のように、これは『ラシーヌとシェークスピア』の出版に連なるが、同様に後年の小説群につながるテーマとしては、ピエール=ルイ・レ氏が「王の形象」を通してスタンダールの歴代のフランス国王に対する見解の変遷をたどり、ジョルジュ・ブリニエ氏の「コングレガシオンとその下部組織」についての実証的な発表はカステックスによる『赤と黒』の校訂版を補うという意味で興味深かった。フィリップ・ベルチエ氏も同様に王政復古下の政治・宗教をめぐる歴史的状況から出発し、イエズス会士の黒いイメージがスタンダールの中で定着していく経緯を追ったうえで、当時流通していた反イエズス会派の言説と彼の主張との間に大幅な共通点を認めた。リチャード・ボルスター氏の発表も、こうしてスタンダールを歴史的に相対化する作業の一環として見なすことができる。イギ

リスの雑誌における 1815 年から 1820 年代にかけての「ボナパルト」神話の形成を検証し、スタンダールの当時のナポレオン観と比較対照する試みであった。『イギリス通信』におけるドイツの位置づけについてはミヒャエル・ネルリッヒ氏が語ったが、スタンダールが多くのページを割いているイタリア・ロマン主義についての発表がなかったのは残念であった。

発表者の関心を最も集めたのは、ジャーナリストとしてのスタンダールの文体である。すべての文体はイデオロギー的であることを免れないとするなら、『イギリス通信』ほど文体と党派性、政治性との緊密な結びつきを体系化して述べている書物もまたとあるまい。イヴ・アンセル氏がスタンダールを「社会批評家」(sociocritique) として規定するのは、まさにそうした文脈においてである。社会階層、政治的・宗教的立場の相違は文壇においても党派を発生させ、それぞれの主義主張に応じた特有の文体が産み出される。新聞がそのよい例である。ミシェル・アル氏の発表は文壇、アカデミー、あるいはサロンにまで蔓延する「仲間ぼめ」(camaraderie) と「ぺてん」(charlatanisme) の習慣の実態、その悪影響、講ずべき対策についてのスタンダールの考察の緻密な分析であった。ジョゼ・ルイ・ディアズ氏はロマン主義作家たちに対するスタンダールの評価に注目し、スタンダールが体制派に対抗し、新しい文学を指向する点では彼らと軌を一にしつつも、文体の嗜好、偏愛するジャンル、理想とするヒーロー像などにおいて一線を画していたことを強調した。

美学的な観点からテクストに取り組んだのはジャック・デュランマ氏とフランチェスコ・スパンドリ氏である。前者は「暗示」(allusion)、後者は「喜劇性」(comique) という概念に着目した。デュランマ氏はスタンダールがマルモンテルとクーリエの文体を範として、暗示的に辛辣な批判を展開する術を学ぶ一方で、書いた文章の裏に過剰な意味を読みとられるのを防ぐための方策も講じなければならなかったという興味深い問題を論じた。スパンドリ氏は「喜劇性」をめぐる語彙の分析にも踏み込んでいたが、こうした語彙的な側面から文体分析を展開するのに最も適任ともいえる『イギリス通信』翻訳者のひとり、ルネ・デニエ氏が今回司会に徹してしまったことが、私には残念に思えた。

○「晩年のスタンダール」(1999 年 12 月 3 日、4 日、ソルボンヌ大学主催、於ソルボンヌ)

本コロックは二日間に 25 本の発表という超過密な日程で、「美学の問題」「小説の問題」「ピカレスクとコミック」「歴史と評伝」「最後の草稿群」の５つの部門に分けて行われた。『パルムの僧院』を除く、今まであまり論じられることのなかった 1837 年以降の作品を対象として、作家の新たな側面を提示しようというものである。従って創作技法や人物像の変化、テーマの推移など、この時期のスタンダールに顕著に現れる傾向に着目した発表が多くみられたのも自然な成り行きであるといえよう。

だが一方で、芸術一般に対するスタンダールの嗜好が一貫してあまり変わらなかったことも事実で、七月王政期に新たに台頭した潮流（例えば音楽におけるグラン・オペラ）に対して、晩年のスタンダールが必ずしも肯定的な態度を示していなかったことから、保守化したという批判も結果として免れえないことを、シュゼル・エスキエ氏の発表がよく示していた。ピエレット・ノー氏の発表（「ピエール・ピュジェとスタンダール」）は、むし

ろスタンダールが従来の鑑識眼を保ちつつ、それを通じてフランス・バロックのような今まで馴染みの薄かった分野の芸術を受け入れる余地も残していたことを強調した。

伝記的、逸話的なアプローチから晩年のスタンダールの作品理解を深めるものとしては、ルネ・セルヴォワーズ氏の『恋愛論』序文の最終ヴァージョンについての考察、あるいは『ある旅行者の手記』中のグランド・シャルトルーズ行きのエピソードをめぐるマルト・ペルー氏の発表を挙げておこう。ニコラ・ブサール氏は『手記』のテクストに歴史哲学の観点から考察を加え、同時代のコンスタンやシャトーブリアン、コントらの超越論的歴史観に対して、スタンダールは歴史的・倫理的相対主義の立場に立ち、個人の主観や感覚に基づいたエクリチュールに拠ることを選んだと述べた。ただし社会状況の変化によってもたらされた「自我の危機」を乗り越えるためには、結局のところ相対主義を棄ててロマネスクな要素、さらには小説という形式に訴えるよりなかったというあたり、議論の余地を残すものであった。ローザ・ベッツォーラ氏は、『ナポレオンの生涯に関する覚え書』に混入するトゥーリズムの要素に関心を寄せた。

しかし何よりも発表者の関心を集めたのは、未完の中短篇小説である。アンドレ・マンソー氏が『あるイタリア貴族の思い出』、『箱と亡霊』、『ユダヤ人』に顕著に表れる 16 世紀のスペインの悪漢小説、およびその延長上にあるルサージュ、マリヴォー的な喜劇的要素に注目すれば、クリストファー・トンプソン氏は『サン・チミエ従男爵』のバロック的な側面を、源泉と間テクスト性の問題を含めて扱った。マリエラ・ディ・マイオ氏も同様の視点から、『深情け』、『スオラ・スコラスティカ』とイタリア古文書との関係について述べた。

「自然なヒロインたちの時代」(«Le temps des héroïnes naturelles») というピエレット・パヴェ=ヨルク氏の発表のタイトルが示しているように、『ミーナ・ド・ヴァンゲル』、『ばら色と緑』、『ラミエル』の一連のヒロイン像もまた議論の対象となった。ヨルク氏は「自然さ」(naturel)「優美さ」(grâce) といった特質によって、彼女たちがいかに「滑稽さ」(ridicule) を免れているかを論じ、ディディエ・フィリポ氏も同様に「グロテスク」、「優美さ」、「羞恥心」(pudeur) をキー概念として、究極的に社会的拘束と恋愛の両方から解放されようとするヒロインとしてラミエルを規定した。

こうした新たなテーマ系の浮上に加え、小説技法にも変化があらわれる。フィリップ・ジュセ氏は『スオラ・スコラスティカ』の文体論分析を試み、その禁欲的な文体がかえって象徴性と寓意性を高め、ロマネスクの創出に貢献しているとした。グザヴィエ・ブルドネ氏は『フェデール』においてスタンダールの紋切り型 (stéréotype) に対する意識が強まることに注目する。この中篇小説では主人公が社交界でメランコリックなウェルテル、ルネ型の青年を演じることによって出世していくことから、貴族が姿を消したブルジョワ社会においては、紋切り型は個人に新たな社会的アイデンティティを提供する役割を担いうると結論づけた。紋切り型の効用に関する見解は全く逆であったが、ミシェル・クルゼ氏も、晩年のスタンダールの小説作法にあらわれる変化を当時の社会状況の大幅な変化とからめて論じた。クルゼ氏によれば、スタンダールがバルザックに学ぼうとしたのも、ロマネスクを捨ててフロベール流のグロテスクに近づこうとしたのも、すべて散文的で野卑な社会の現実を描こうとした結果である。『フェデール』のボアソのような地方出の「成

金」が跋扈し、情欲にもえたブルジョワの伊達男たちが上京してきたラミエルを追い回す、それが「キング・フィリップ」治下のパリである。スタンダール晩年の中短篇がほとんど未完に終わった理由も究極的にはそこにあるとする。

未完の理由については最終的な解答は得られないにしても、ほかにも複数の発表者がそれぞれの立場から、それぞれの作品について仮説をたてていたのが興味深かった。上述のディ・マイオ、トンプソンのほか、クリスチーヌ=マリア・バルゲリ氏は中絶した数篇の小説の分析を通じて、スタンダールが既成のテーマの反復をおそれるあまりに筆をおいた、あるいは緊密な文体によるあらたな短篇形式の創造を試みて挫折した、などおもに創作上の障碍による中断説を唱えた。が、同様の仮説でも、『ばら色と緑』の草稿を詳細に検討したジェラルド・ラノー氏による立論のほうが説得力があったことは否めない。晩年の未完作品にまだまだ研究の余地が残されているとすれば、それは草稿の存在によるところが大きい。『イタリア名画解説』を校訂中のエレン・ド・ジャクロ氏、および『ラミエル』草稿研究によって博士論文を準備中のセルジュ・ランケス氏の研究の成果が待たれる所以である。

【書評・新刊紹介】

書評——Pierre-Jean REMY, *Le Rose et le Blanc*. Albin Michel, 1997, 530p.

井出 勉

1832年6月4日に幕を開けるこの小説を一読すると、しっかりした時代考証に基づき、スタンダールという《通奏低音》に、自由に創造した人物を遊ばせているといった感を抱くことだろう。日本にも、大岡昇平のように、スタンダールと切り離して考えることのできない作家がいる。P.-J. REMY も、《スタンダール的色彩》に彩られた文章の小説を書いた。もちろんスタンダリアンならずともタイトルの『薔薇色と白』から、『赤と黒』を容易に思い浮かべることができる。『薔薇色と緑』でもいいだろう。さらに、P.-J. REMY 自身がかなりあからさまにばらまいた一連の《目くばせ》が、作者がスタンダールを強く意識していることを教えてくれる。こうした一連の《目くばせ》の中には、かなりスタンダールのことやその作品を読み込んでいないとわからないものが多いのも事実である。

タイトルからの印象では、あらすじをスタンダールの作品に何らかの形で負うているのではと思ったが、そうではなく登場人物のバックグラウンドを借用しているものが多い。これを先ほどはP.-J. REMYの《目くばせ》と表現したが、530ページにわたる長編のせいかややもすると多くの人物を書き込みすぎ、『パルムの僧院』におけるモスカやサンセヴェリーナ公爵夫人のように、とりわけ女性の副次的人物が強烈な個性を放つ反面、主人公と目される人物への焦点がぼけてしまっている感は否めない。もっともそれが作者の意図するところだったのかもしれないが。

この小説には、もう一つ別の面がある。それは、一種の《ミステリー小説》として読む楽しみである。『薔薇色と白』のそれぞれの色が何を意味するのか、読者は最後まで答えを求めて読み続けることになる。果たして答えは得られるのか。もちろん様々な解釈が可能であろう。一つの解釈として太陽の《薔薇色》、雪の《白》に象徴される《豊饒と不毛》が考えられる。パリから理想のコロニーを求めて移り住んだ２０名ほどの雑多な集団は、苦労の末、不毛の地を牧歌的な楽園に変えることに成功したかに見える。野生の牝鹿のような少女が偶然発見する失われた水源も、不毛の谷を緑豊かな庭に変貌させるかに見える。しかしやはり《アルミダの庭》は束の間のものでしかない。このグループの精神的指導者であるグザヴィエが、オクターヴの分身ともいえる人物で、同じ病を抱えている《不毛な》男として設定されているがゆえに、最終的な《豊饒》には至らないのは明白であろう。《楽園喪失》の原因の一つとなる二件の殺人事件の犯人探しも、この小説に《ミステリー小説》の趣を与えている。種明かしが用意されているアン・ラドクリフ夫人の暗黒小説的なところもあり、夜の風景、満月、さらには黄金の声を持ちながらミステリアスで、健康面ではフラジールな歌姫ラ・ジウスタなどロマン主義的背景にも事欠かない。

この小説はまた、《音》や《匂い》に敏感な一種の感覚小説としても楽しめる。プルースト的とも言えるが、モーツアルトやチマローザの名が挙げられているように、やはり音楽的には完全にスタンダール的な趣味で支配されている。また、このパリから田舎へ移り住んだグループの真の求心力が歌姫ラ・ジウスタであるがゆえに、彼女の声の衰えは共同体の崩壊、楽園の喪失へとつながっていくのである。

結局、この小説の読者が、同時にスタンダールの、19 世紀の小説の熱心な読者でもあるならば、530 ページを読み飛ばしていくことは難しいだろう。多くの箇所で、次々と夢想に誘われ脇道へと逸れていくことだろう。それはまた疲れはするが、有益な読書のひとときとなることを祈りたい。

書評

Ernest Mignatte, *Le copiste de Monsieur Beyle*. Roman. Éditions Metropolis, 1998.

粕谷 祐己

『パルムの僧院』の口述筆記でコピストをつとめた人物の日記が発見されたという設定で書かれた、短いが楽しい小説である。この日記の語り手はアルスナルのサロンに出入りする文学者であるが名もなく財産もなく、糊口をしのぐためにベイル氏のコピスト役を引き受ける。サロンの主ノディエの娘マリーと相愛であるが、この小説に登場するノディエは娘に有利な結婚を強いる圧制的父親そのものであり、彼の思いはかないそうにない。このような彼とスタンダールを取り巻く状況がだんだん『パルム』の物語世界の中に写し込まれていく――という趣向である。

語り手の目に映るわれらがスタンダールことベイル氏の姿は、少々手厳しい肖像ではあ

るがまあこのようなものであろうと思わせて興味深い。ぞっとするほどグロテスクで嫌らしい真似をやらかしてくれるところなども「なるほどベイルさんなら機会があればやりかねないかなあ」と変に感心してしまう。もちろん随所でお馴染みのベイル節を吐いてくれるのも楽しい。

なお著者のエルネスト・ミニャットとはさる著名スタンダール研究家の筆名であることが周知の事実となっている。だから『パルム』のいくつかの部分 -- ジレッチとの果たし合い、脱獄の下り等々 -- が主人公のコピスト自身の手になるという設定なのは一応著者に根拠があってのことなのだろう。しかしたとえばファブリスとクレリアが結ばれるシーンの "aucune résistance ne fut opposée" がスタンダール自身のものではない、なんてありうるだろうか？　筆者には承服しがたい！

【お知らせ】

EQUIPE MANUSCRITS DE STENDHAL について

粕谷　祐己

待望久しかった Gérald Rannaud 氏の大著 *Vie de Henry Brulard,* édition diplomatique も完結しましたが、この著の制作過程からグルノーブル市立図書館 Fonds Stendhal の科学的方法論にのっとった研究が始められ、現在そのデータベース化の仕事に携わるチームは Equipe Manuscrits de Stendhal の名を冠しています。スタンダールの手稿のカタログと、作品の初版本や手書き注釈入り本カタログ（Fonds Bucci, Fonds Doucet なども含む）の二つの作成が予定されています。なお Base de données d'inventaire et d'analyse du fonds は事実上ほぼ完成しました。これは一枚一枚の手稿の大きさ、紙質、インク等々のデータを綿密に記録したもので、これが将来手稿そのものをスキャンした画像のデータベース Bibliothèque d'images とリンクされることになります。この Equipe についての詳細については http://www-msh-alpes.upmf-grenoble.fr/ems/を御覧下さい。

なお聞くところによれば今 Equipe では、普通のスキャナーの機械で扱える範囲を越える大きさの手稿は、デジタル・カメラで撮るのでは鮮明度が格段に下がってしまうのでどうするかが問題になっているところだそうです。御助言等がありましたら是非お伝え下さい。